

Title	追悼 鶴木眞先生：「追悼」鶴木眞さん逝く
Sub Title	
Author	瀬下, 英雄(Sejimo, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所
Publication year	2016
Jtitle	メディア・コミュニケーション：慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要 (Keio media communications research). No.66 (2016. 3) ,p.126- 126
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1121824X-20160300-0126">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1121824X-20160300-0126</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



## 「追悼」鶴木眞さん逝く

瀬下英雄

鶴木さんの大学人としての多くの功績については多くの方がこの追悼録にお書きになっておられると思う。そこで、ここでは私と鶴木さんの個人的な交友を中心に綴らせて頂いた。

今年（2015年）7月初旬、私はいつものように鶴木さんの携帯電話番号をタッチした。すると女性の声で「鶴木です」という。鶴木さんは東京・有明の癌センターで抗がん剤治療を受けておられ治療のスケジュールに合わせて入退院をいわば日常的に繰り返しておられたので、入院先の鶴木さんと携帯電話で話すという事はよくあった。だが電話に別の人、今回のように奥様が出てこられるという事はなかった。「今回は（病院から）出られないかもしれない」との趣旨を仰った様に記憶している。それから間もなく、7月15日未明、鶴木さんは72歳の人生を終えられた。

「僕は余命あと半年と医者に言われた」と鶴木さんが私に淡々と話されたのは亡くなるより一年は前だったかと思う。だが、その後の生活ぶりは変わらなかった。私も誘われて参加する事になった「テロ安保警察学会」（外務省、防衛省、大学の関係者の集まり）では月に一回お会いし、夕方会が終わると二人で国際政治を始め色々な事を議論した。その時鶴木さんは私の心配をよそにビールそしてウイスキーの水割りを飲んだ。東京・銀座の交詢社でも度々食事をしたが、そこでも健啖ぶりを見せると同時にお酒も楽しんだ。私は内心ヒヤヒヤしながらも取敢て強く止める事はしなかった。又、確か今年（2015年）に入って間もなく、鶴木さんから「テロ安保警察学会の会長を引き受けて欲しいと言われた」と相談を受けた。私は「おやりになったらいいですよ」と促した。私は、勿論医学の専門家ではないが「余命あと半年」をぶっ飛ばすには鶴木さんに新しい職責に向かう気力を持ってもらう事も一つと信じた。だがその甲斐もなく間もなく鶴木さんは帰らぬ人となった。葬儀の席で会長の職責を急遽、鶴木さんから引き継いだという方から「吃驚した」と話しかけられた。私は、「実は」とお話ししたあとお詫びの言葉を伝えが無念の思いであった。

さて、私と鶴木さんとは慶應義塾大学法学部政治学科の後輩と先輩という関係だった。私は1966年（昭和41年）に卒業してNHKへ。鶴木さんは一年前、卒業と同時に学究の道へ進まれた。当時の二人の接点が新聞研究所（現メディア・コミュニケーション研究所）だった。そして二人が再び巡りあって本格的な付き合いをする様になったのは、多分、2000年頃新聞研究所の卒業生の会「綱町三田会」の年に一度の総会の席であった様に思う。鶴木さんは十文字学園女子大学の学長などを歴任されており、私はNHKを退職、その頃TVの世界を席卷し始めたデジタル放送の推進に当たる組織を預かる立場だった。やがて、私が綱町三田会の代表幹事をお引き受けした事もあって二人の接点は度々となり、お付き合いは密になっていった。

よく知られている様に、鶴木さんは長い学究生活を通して数多くの研究論文、著書を著しておられたが、綱町三田会が2011年にスタートさせた月刊の電子版ジャーナル誌「メッセージ@pen」（message-at-pen.com スマホ版）にご寄稿をお願いしたところ、快く引き受けてくださった。私たち編集部のお願いは中東問題についてだった。鶴木さんは若い時代にエルサレムのヘブライ大学に留学された経験をお持ちで、まず、「1973年・第4次中東戦争体験記」を2013年10月号から8回に分けて連載して頂いた。又、特に「IS」について2014年10月号から3回書いて頂いた。そして、亡くなる直前、2015年6月号の「不思議な組織“イスラーム国”モヤモヤ感の不気味さ」が絶筆となった。イスラーム国問題ではテロ安保警察学会でも鶴木さんと様々な議論をした。特にある時鶴木さんの東大教授時代の教子でイスラム問題のエキスパート池内恵氏を迎えての議論は忘れられない。テロとの闘いという表面的な捉え方だけではなく、オスマン帝国時代から現代に至るまでの中東地域の歴史、イスラム教の真意をも見据えた深い洞察力にもとづく示唆に富む指摘が際立っていた。イスラム問題は益々混迷を深めているが、今や鶴木さんと議論をする刺戟的かつ知的な楽しみが失われてしまい寂しい限りだ。ご冥福をお祈りしたい。

(2015年12月20日)

瀬下英雄（綱町三田会代表幹事）